調査報告

滋賀県蒲生郡日野町における蔵王産花崗岩製中世石造美術の分布

― 日野町石造美術石材分布調査概要 ―

兼康　保明

1．はじめに

鈴鹿山麓に近い滋賀県蒲生郡日野町蔵王が、近江の中世石造美術製作の一大拠点であることを提唱したのは田岡香逸氏であった。田岡氏は、湖東に分布する石造美術の、構造形式や細部の手法を精密に分析し、比較検討することから、蔵王に石造文化圏の核となる花崗岩の「石切場」があることを、仮説として浮かび上がらせた。①

田岡氏が石造美術から仮説として導きだした、蔵王における中世石材工業の実態を、私は考古学の立場から生産遺跡として実証すべく、蔵王の産石地である「かったい谷」の調査を昭和61年に行った。その調査の結果、蔵王産の花崗岩（細粒黒雲母花崗岩）が、地元では「米石」とよんでいる、結晶粒の細かい、きわめて特徴のある石材であることに気づいた。②そこで「かったい谷」の石材調査以後は、産石地に近い蒲生郡を中心に、蔵王産の「米石」を用いた石造美術の分布を確認することに努めてきた。今回ここでは、田岡氏によって石造美術の調査がまとめられ、しかも蔵王の石材産地から最も近い、蒲生郡日野町内における米石製の石造美術の分布について報告したい。

2．調査の方針

蔵王産の「米石」を用いた中世石造美術全体については、大小の組み合わせ式五輪塔や、尊像や石塔等を彫った室町時代後期の小形板碑まで含むと、その量は膨大な数におよぶ。そのため現状では、これらを含めての、正確な数字をつかむことは困難である。そこで、比較的資料が限定され、分布の明らかな、鎌倉・南北朝時代を主とした石造美術について、石材の検討を行った。

調査の基礎資料としては、田岡氏が蔵王の石造文化圏設定の資料にされた、『近江の石造美術』3③および『民俗文化』発表の論考④を用い、現物を再調査し、石質については肉眼観察によって判定した。ただ、資料によっては、風化あるいは石材の表面が地衣類によっておおわれ、観察の困難なものもあったが、概ね日野町内にある蔵王産の石材を用いた石造美術の分布と傾向は把握できたものと思う。

3．日野町主要中世石造美術一覧

ここにあげた個々の石造美術は、石材を検討することが目的であるが、参考までに各石造美術の形式的検討を行ううえでの必要事項についてのみを付記した。したがって、各々の写真、拓本、計測値等について、さらに詳細なデータを必要とする場合は、『近江の石造美術』3を利用願い

たい[5]。以下、資料の順序は『近江の石造美術』３に準じる。

【凡例】

１．掲載した各石造美術の石材は、すべて広義の花崗岩である[6]。米石とあるものは、蔵王産の細粒黒雲母花崗岩で、それ以外の産地のものは×印で標示した。蔵王産の石材以外の花崗岩の産地や製品の分布については、岩石学的な検討を行って後、改めてその結果を報告したい。

２．石塔の基礎は、注記の無い場合は、輪郭と格狭間をもつものである。

３．資料番号は、『近江の石造美術』３の通し番号である。

４．ここで用いる年代観は、田岡氏の時代区分による。

鎌倉時代　前期　文治改元（1185）～文暦元年（1234）
　　中期　文暦２年（1235）～弘安７年（1284）
　　後期　弘安８年（1285）～建武改元まで
南北朝時代前期　建武改元（1334）～文和３年（1354）
　　中期　文和４年（1355）～応安７年（1374）
　　後期　応安７年（1374）～応永改元まで
室町時代　前期　応永改元（1394）～応仁元年（1467）
　　中期　応仁２年（1468）～天文10年（1541）
　　後期　天文11年（1542）～慶長末年（1615）

５．番号以外にアルファベットをつけたものは、『近江の石造美術』３刊行以後に、田岡氏の調査した資料による[7]。

６．分布調査時の見解は、備考として記入した。

①　層　塔

１．猫田・禅林寺　　平安後期～鎌倉初期　×
　　基礎・笠４層
２．中山西・金剛定寺　　建長４年（1252）　×
　　塔身・笠３層
　　（備考）　隣接する池のほとりに、基礎と思われる石材が半ば埋没している
３．寺尻・旧長徳寺　　乾元２年（1303）　？
　　基礎に孔雀文・三茎蓮・開花蓮
　　県外所有・未調査
４．小御門・旧浄教寺　　元応元年（1319）　？
　　基礎に三茎蓮・開花蓮
　　県外所有・未調査

②　宝　塔

５．村井・蒲生貞秀墓　　鎌倉後期（1290年頃）　米石

基礎（壇上積式）に孔雀文・宝瓶三茎蓮（二面）・開花蓮

6．蔵王・寂照寺　鎌倉後期（1300年代はじめ）　米石

相輪を除き完存。基礎に宝瓶三茎蓮（二面）・開花蓮

7．西明寺・西明寺墓地　乾元２年（1303）　米石

基礎（壇上積式）に正面のみ宝瓶三茎蓮

8．別所・盛願寺　鎌倉後期（1310年頃）　米石

基礎

9．猫田・禅林寺　正和４年（1315）　米石

相輪上部を欠失するほか完存。基礎に宝瓶三茎蓮（二面）・開花蓮

10．鎌掛・正法寺　正和４年（1315）　米石

完存。基礎に正面のみ開花蓮

11．西大路・晴明寺　元応在銘（1319～1320）　米石

塔身

12．西明寺・西明寺墓地　鎌倉後期（1320年頃）　×

完存。

13．杉・地蔵堂横　鎌倉後期（1330年頃）　米石

基礎に宝瓶三茎蓮（三面）・散蓮

14．安部居・念法寺　南北朝中期（1360年頃）　×

相輪を除き完存

③　宝篋印塔

15．蔵王・寂照寺　鎌倉後期（1290年頃）　×

相輪を除き完存

基礎に宝瓶三茎蓮(四面)、塔身に仏座像(四面)、笠の隅飾は一弧素面

16．北脇・法光寺　鎌倉後期（1295年頃）　×

基礎に開花蓮・散蓮（三面)、上部は反花式

17．佐久良・仲明寺墓地　右塔（寄せ集め）

基　礎　鎌倉後期（1295年頃）　米石

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（二面）・宝瓶二茎蓮・開花蓮、上部は反花式

笠　南北朝前期（1340年頃）　米石

隅飾は輪郭付二弧で内部は素面

18．日田・野田克躬家　（寄せ集め）

基　礎　鎌倉後期（1295年頃）　？

基礎（壇上積式)、上部は反花式。未調査

笠　南北朝中期（1365年頃）　？

隅飾は輪郭付二弧で内部は素面。未調査

19. 北畑・八幡神社　正安元年（1299）　米石

各部破損するが完存

基礎（壇上積式）、塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付二弧

20. 十禅寺・比都佐神社　嘉元２年（1304）　米石

相輪を除き完存。

基礎に孔雀文（二面）・開花蓮、塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付三弧で内部は素面

21. 三十坪・誓光寺　鎌倉後期（1305年頃）　×

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）・開花蓮

22.. 中山東・地蔵堂　鎌倉後期（1305年頃）　（×）

笠の隅飾は輪郭付二弧で内部に八面とも種子

（備考）　埋没した笠を確認しているが、それが田岡氏の報告しているものかどうか、掘り出して確認していない

23. 村井・信楽院墓地　（寄せ集め）

基　礎　鎌倉後期（1300年代後半）　米石

基礎(壇上積式)に宝瓶三茎蓮・開花蓮(二面)・散蓮、上部は反花式

塔　身　延慶元年（1308）　米石

蓮華座上に月輪を線刻し、内部に種子（四面）

笠　鎌倉後期（1310年代後半）　×

隅飾は二弧素面（三面）、輪郭付二弧で内面に蓮華座、種子を配した月輪

24. 村井・晴明寺　鎌倉後期（1308年頃）　米石の可能性もある

塔身は蓮華座に月輪を線刻し、内部に種子（四面）

25. 杉・大屋神社　鎌倉後期（1310年頃）　米石

完存。

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（二面）、塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付き二弧で内部は素面

26. 大窪・大聖寺墓地　鎌倉後期（1310年頃）　×

基礎に正面のみ宝瓶三茎蓮、上部は反花式

27. 猫田・共同墓地　鎌倉後期（1310年頃）　×（花崗斑岩か）

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮・開花蓮（三面）

28. 村井・信楽院　鎌倉後期（1310年頃）　米石

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）・開花蓮、上部は反花式

（備考）　元は墓地にあったが、現在は境内の秘仏堂にある。

29. 中在寺・広照庵　正和元年（1312）　米石

基礎（壇上積式）の上端に箱形の奉籠孔を彫る

30. 中在寺・津島神社　鎌倉後期（1315年頃）　米石

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）、上部は反花式

31. 三十坪・清徳寺　鎌倉後期（1315年頃）　×

笠の隅飾は輪郭付二弧で各面蓮華座上の月輪に種子

a. 村井・信楽院　文保元年（1317）　米石

基礎（壇上積式）に獅子文、上部は反花式。基礎の一面のみの残欠

32. 西明寺・西明寺墓地　鎌倉後期（1318年頃）　米石

笠の隅飾は輪郭付二弧で、内部に二弧の隅飾形・内部素面（三面）

33. 河原・妙楽寺跡　鎌倉後期（1317年頃）　×

相輪上半を欠失する他は、完存。

基礎（壇上積式）に開花蓮（三面）・散蓮、塔身に種子（四面）、笠の隅飾は二弧素面

34. 内池・摂取院墓地　元応２年（1320）　米石

相輪を除き完存

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）、塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付三弧で内部は素面

35. 中在寺・津島神社　元応３年（1321）　米石

相輪の上下を欠失する他は、完存。

基礎（壇上積式）、塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面

36. 小谷・宗福寺墓地　鎌倉後期（1320年頃）　米石

基礎（壇上積式）、上部は反花式。笠の隅飾は二弧素面、、相輪は請花・宝珠を欠失

37. 三十坪・誓光寺墓地　鎌倉後期（1320年頃）　×

塔身に仏座像・線刻した月輪内に種子（三面）

38. 中山東・隆讃寺　鎌倉後期（1320年頃）　×

笠の隅飾は一弧素面

（備考）　位牌堂の改築時に鎌倉後期頃と推定される米石製の笠が出土している。詳細な観察は行っていないが、笠の隅飾は輪郭付三弧で内部は素面と思われる。

39. 西明寺・西明寺　鎌倉後期（1320年頃）　米石

塔身に線刻した蓮華座と月輪内に種子、蓮華座の無いもの（三面）

40. 北脇・法光寺　嘉暦２年（1327）　米石

相輪の上部と笠・塔身の一部を欠失するが完存

基礎（壇上積式）に孔雀文・三茎蓮（二面）・開花蓮、塔身に種子、

笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面

41. 西大路・法雲寺　鎌倉後期（1328年頃）　米石

笠の隅飾は輪郭付三弧で内部は月輪を配する

42. 別所・盛願寺　嘉暦４年（1329）　米石

基礎（壇上積式）、笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面

43. 小谷・宗福寺　鎌倉後期（1330年頃）　米石

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮、塔身に線刻した月輪内に種子、種子のみ二尊

44. 中山東・隆讃寺　鎌倉後期（1330年頃）　×

笠の隅飾は一弧素面

45. 下駒月・西照院　鎌倉後期（1330年頃）　×

塔身に仏座像と線刻した蓮華座・線刻した月輪内に線刻した蓮華座と種子（三面）

（備考）　『近江の石造美術』３には、安楽寺境内とあるが現状は隣接する西照院境内にある。

46. 大窪・慈眼院　暦応２年（1339）　米石

完存。基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）・散蓮、塔身に種子（四面）、上部は反花式。笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面

47. 野出・託仁寺　南北朝前期（1345年頃）　×

特殊宝篋印印塔。基礎（壇上積式）、上部は反花式。笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面

48. 音羽・雲迎寺　貞和５年（1349）　米石

相輪上部を欠失する他は完存。

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）、上部は反花式。塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付二弧で内面は素面

49. 中之郷・正住寺　南北朝前期（1350年頃）　米石

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（二面）・散蓮、上部は反花式。笠の隅飾りは輪郭付二弧で内部は素面

（備考）　『近江の石造美術』３にある観音堂は、改修され正住寺とよばれている。

50. 下迫・清寿庵　南北朝中期（1365年）以降　×

基礎に開花蓮（三面）、上部は反花式

51. 里口・八幡神社　貞治５年（1366）　米石

相輪を除き完存。

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）・散蓮、塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面

52. 増田・誓善寺　　貞治6年（1367）　　米石

完存。

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（二面）、塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面

（備考）　各部とも花崗岩であるが、相輪の石材のみ塔身・基礎と異なる

53. 中山西・会所横　　南北朝後期（1375年頃）　　米石

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）、四隅に細い素弁の反花を刻出

54. 下迫・清寿庵　　南北朝後期（1375年頃）　　米石

基礎（壇上積式）、反花式。笠の隅飾は輪郭付三弧で内部は素面

55. 木津・薬師堂横　　康暦元年（1379）　　米石

完存。

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）・散蓮、塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面

56. 三十坪・誓光寺墓地　南北朝後期（1380年頃）　　米石？

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）・散蓮、反花式。

57. 西大路・法雲寺　　南北朝後期（1380年頃）　　米石

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（四面）

58. 蔵王・聞空寺　　南北朝後期（1380年頃）　　米石

相輪の一部を欠失する以外は完存。

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮・開花蓮（二面）、塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面

59. 熊野・熊野共同墓地　南北朝後期（1380年頃）　　米石

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（四面）、笠の隅飾は輪郭付三弧で内部は素面

60. 中山西・会所横　　南北朝後期（1385年頃）　　米石

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）

61. 原・原共同墓地　　明徳元年（1390年頃）　　米石

相輪を除き完存。

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）・開花蓮、塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付三弧で内部は各面蓮華座上の月輪に種子

62. 原・原共同墓地　　南北朝後期（1390年頃）　　×

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮・開花蓮（三面）、反花式。

63. 十禅寺・比都佐神社　南北朝後期（1390年頃）　　米石

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）

64. 鎌掛・正法寺墓地　　南北朝後期（1390年頃）　　米石

基礎（壇上積式）に三茎蓮（四面）

65. 鎌掛・原古野地蔵堂　南北朝後期（1390年頃）　？

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）。未調査

66. 奥の池・八幡神社　室町前期（1400年頃）　米石

相輪が折れているが完存。

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（四面）、塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付三弧で内部は各面蓮華座上に月輪

67. 安部居・念法寺　室町前期（1400年頃）　米石

相輪が折れているが完存。

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）、塔身は素面、笠の隅飾は輪郭付三弧で内部は素面

68. 佐久良・仲明寺墓地　（中塔）

基　礎　室町前期（1400年頃）　米石

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）

笠　鎌倉後期（1330年頃）　米石

隅飾は輪郭付二弧で内部は各面月輪

69. 蓮華寺・信楽寺　室町前期（1410年頃）　米石？

相輪を除き完存。

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）、上部は反花式。塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面

70. 杉・地蔵堂　室町前期（1430年頃）　米石

基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（四面）

71. 大窪・大聖寺墓地　室町前期（1440年頃）　×

完存。

基礎上部は反花式。塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面

72. 中山西・金剛定寺　室町中期（1450年頃）　×

笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面

73. 中在寺・広照庵墓地　室町中期（1500年頃）　？

基礎上部は反花式。塔身に種子（四面）

（備考）　不明

74. 中山西・中山西共同墓地　永正元年（1504）　米石

相輪を除き完存。

基礎（壇上積式）に三茎蓮（四面）、上部部は反花式。

塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面

75. 佐久良・仲明寺墓地　（左塔）

基　礎　　室町後期（1530年頃）　　米石
基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）
笠　　室町前期（1430年頃）　　米石
隅飾は輪郭付三弧で内部は素面

④　五輪塔

76. 小谷・宗福寺墓地　　鎌倉後期（1330年頃）　　米石
塔身残欠、正面に種子

77. 西明寺・民　家　　南北朝前期　　？
塔身残欠、正面に種子、奉籠孔有り。未調査

78. 中在寺・広照庵　　南北朝前期（1345年頃）
笠・・・×　　塔身・・・米石
塔身正面に種子、笠は素面
（備考）　『近江の石造美術』３では、「塔身に対して笠がやや小さすぎる感があるが、この程度のものは珍しいことではない。石質がよく似ているし、構造形式も一致しているから、まず、一具のものと見て差し支えがないであろう」としているが、笠と塔身の石材は異なっており、寸法の違いも含めて２基の寄せ集めと考えるべきであろう。

79. 村井・晴明寺　　室町後期　　米石
基礎に種子（四面）

80. 西大路・法雲寺　　伝蒲生賢秀墓　室町後期　　×

⑤　板　碑

81. 村井字菅谷・社氏墓地　　延慶３年（1310）　　×
碑伝形板碑　高さ215ｍ

82. 上野田・正覚寺　　応安３年（1370）　　米石？
亜形式板碑　　高さ176㎝

83.. 鎌掛・笹尾峠　　明応９年（1500）　　？
亜形式板碑　　高さ204㎝

84. 西明寺・西明寺　　室町後期　　？
弥陀一尊板碑　高さ46㎝　三茎蓮有り
（備考）　不明・未調査

85. 西明寺・西明寺　　室町後期（1535年頃）　　米石
宝篋印塔板碑　高さ76.6㎝
薄肉彫りした宝篋印塔の基礎は壇上積式で、三茎蓮を刻出
（備考）　背面に原石肌を残す。河原石か？

86. 西明寺・西明寺　　室町後期（1535年頃）　　米石
双宝篋印塔板碑　高さ47.2㎝
（備考）　背面に原石肌を残す。河原石か？
87. 別所・盛願寺　　室町後期（1545年頃）　　米石
弥陀二尊板碑　高さ51㎝　格狭間に宝瓶三茎蓮

⑥　笠塔婆

88. 中山西・会所横　　室町後期（1530年頃）　　米石
基礎・塔身・笠より成る
塔身に地蔵立像を二軀並べる。笠は一部欠失

⑦　無縫塔

89. 別所・盛願寺　　室町後期（1540年頃）
請花・・・米石か？　　塔身・・・×
重制無縫塔

⑧　石燈籠

90. 村井・綿向神社　　鎌倉後期（1330年頃）　　米石か？
（備考）　風化のため観察が難しい
91. 北脇・諸木神社　　南北朝前期（1340年頃）　　×
92. 石原・石原神社　　貞和４年（1348）　　×（花崗斑岩）
93. 河原・妙楽寺跡　　応安２年（1369）　　？
（備考）　盗難

４．石造美術の種類と米石

日野町の主要な石造美術の石材は、さすがに産石地に近いだけあって、蔵王産の細粒の花崗岩――「米石」が顕著である。しかし一方では、蔵王付近では見られない、粗粒の花崗岩もかなり使用されている。粗粒の花崗岩については、まだ産地の比定はできていないが、石造美術の石質の観察によれば、少なくとも「米石」以外に２種類は認められそうである。

蔵王と対極を成す、蒲生郡の西に位置する近江八幡市岩倉産の花崗斑岩を用いた石造美術は、鎌倉・南北朝時代のものはほとんど日野町内に入っておらず、わずかに２例を教えるのみである。しかも、日野川流域の、岩倉に近い町域の西部に限定されている。

この一覧表だけをみると、層塔や板碑、石燈籠など石造美術の種類によっては、一見、「米石」を使用していないような印象を与えるものもある。しかしそれぞれ、隣接地域に所在するものや、日野町内でも残欠まで調べると、いちがいにそうとは言えないことが判る。例えば層塔は、隣接する日野川流域の蒲生町上麻生の旭野神社にある元徳元年（1329）七重塔[⑧]が「米石」で、日野町

第1図　石造美術石材分布図

内においても、杉の地蔵堂横で、幅36㎝、高さ19㎝の軸部と一体になった笠の残欠がある。また、石燈籠についても、やはり日野川流域では蒲生町岡本の高木神社にある正和４年（1315）石燈籠[9]が、「米石」である。また、八日市市神田の河桁御河辺神社にある延慶４年（1311）石燈籠[10]も「米石」の特性を生かした優品である。ただ、鎌倉・南北朝時代の板碑のように、１ｍ以上の長さのあるものについては、中世の花崗岩の採石が岩盤からの切出しではなく、玉石によるものであることを考えると[11]、蔵王のかったい谷にある玉石では、本格的な板碑に用いるような、長い石材を採るのに適した玉石は求めにくい。そのため、本格的な板碑の製作には不向きであったことは言うまでもない。しかし、室町後期の小形板碑については、その大きさの石材が十分に得られることから、一覧表以外にも多数の資料がみられる。

結論から言うと、現状では日野町内で確認されていなくても、鎌倉・南北朝時代には、蔵王の石材は、種類を特定して用いられるのではなく、層塔、宝塔、宝篋印塔、五輪塔、石燈籠などすべての石造美術を製作している。

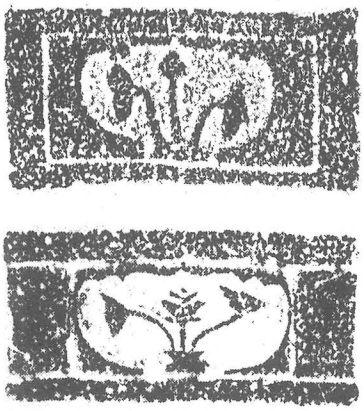
５．蔵王産石材使用の上限

日野町内の鎌倉・南北朝時代の主要な石造美術の石材を検討した結果、すでにみてきたように、蔵王産の「米石」以外にも、粗粒の花崗岩がかなり使用されていることが判った。中でも注目されるのは、採石地のかったい谷に近い蔵王の寂照寺境内にある鎌倉時代後期でも早い時期に考えられている、笠に一弧素面の隅飾をもつ宝篋印塔（15）である。この宝篋印塔の石材は、「米石」ではなく、粗粒の花崗岩である。ところが同じ境内に並列して建つ宝塔（６）は、「米石」で作られている。田岡氏の編年観によれば、寂照寺の宝篋印塔（15）は宝塔（６）より、わずかに年代的には古いものと見られている[12]が、良質の石材産地の膝元に、蔵王以外の場所で産出する石材で作った塔があることは、どう考えれば良いのであろうか。

ちなみに、日野町内の石造美術を年代順にみると、鎌倉時代後期の1290～1300年頃を上限に「米石」が使われはじめ、それ以前の鎌倉時代中期より古いもの（１、２）については、「米石」の使用が認められない。日野町に隣接する蒲生町内においても、「米石」を用いた石造美術は、現在のところ鎌倉後期の1300年を遡る例は知られていない。

このように「米石」を用いた石造美術の上限を求めて行くと、鎌倉時代後期の1290～1300年より以前の作品は見られず、まだ石造美術に蔵王の石材の利用がなされていなかったと考えるべきであろう。さらに、石材の違いだけでなく、寂照寺宝篋印塔（15）の基礎にみられる三茎蓮のつくりが、そう時間を経ずして現れる、「米石」を用いた宝塔や宝篋印塔などの石造美術の基礎に彫られた三茎蓮と、タッチ、茎の太さ、宝瓶の形態などが異なっていることも注意すべき点であろう。タッチや茎の太さについては、石材の質によって左右される要素もあるが、宝瓶の形態の相違については、石工の意匠の違いとしか言いようがない。寂照寺宝篋印塔（15）にみられる三茎蓮は、格狭間内における宝瓶の口縁部の配置、三茎蓮のタッチ、茎の太さなど、伊香郡木之本町西徳寺にある弘安10年（1287）七重塔の基礎に見られる三茎蓮[13]と同系統のものである。

おそらく蔵王で石造美術の製作がなされる以前から、別な石工とそれに関連する産石地があっ



第２図　二種の三茎蓮

（上）蔵王・寂照寺（15）1290年頃

（下）佐久良・仲明寺墓地（17）1295年頃

たのだろう。そのため、日野においても両者が並存して石造美術を供給していた時期があったため、寂照寺境内にみられるように、きわめて近い時期に作られた、石材と細部部の意匠の異なる石造美術が残されたのであろう。

こうしてみると、蔵王産の石材を用いて、細部の装飾に独自の意匠を生みだした蔵王の石工が活躍するのは、現存する石造美術からみて、すでに述べたように鎌倉後期の1290～1300年頃からで、14世紀の第一四半期にはもう日野町内では、他の石材を用いた石造美術を圧倒するようになり、1300年～1400年の100年間に、名実共に蔵王の石造文化圏を形成するようになってゆく。

６．蔵王産石材使用の終焉

日野町各所にみられる、室町時代の小形の組み合わせ式の五輪塔や板碑については、ここでは詳細に触れるつもりはない。しかし、蔵王の「米石」の使用については、これまでからの調査で得た感触からすれば、鎌倉時代後期より中世を通じて、一貫して室町時代後期まで使用され続けている。『近江の石造美術』３に収録された資料では、（85）～（87）の小形板碑がこれに該当する。三茎蓮を施さない小形板碑は、蔵王を中心にかなりの数が認められる。製作工程については、背面に原石の皮肌を多く残すもので、かって湖東北部の資料でその製作工程を復元したものと共通する⑭。皮肌の風化はスベスベしており、川原石の肌を思わせるものも多く、犬上郡甲良町金屋の金山神社境内の小形板碑の未製品群⑮のように、日野川の河原石の利用も考えられる。また、小形の組み合わせ式の五輪塔の残欠については、町内全域にその分布がみられるが、基礎の比率などからみて、時期的には室町後期よりも遡るものも含まれていると見て良いだろう。このような記年銘をもたず、装飾などに特色の無い、量の多い石塔については、編年観の確率と実態の把握が今後に望まれる。

そうした中で、一石五輪塔は大半が花崗岩製であるにもかかわらず、「米石」を用いたものは全く目につかなかった。角柱状の一石五輪塔ではあるが、近江では犬上郡甲良町金山神社例にみられるように、河原石からでも製作されており⑯、小形板碑から推定される蔵王付近に露頭している土中の玉石や、日野川の河原石からでも十分製作が可能なはずである。ところが「米石」の一石五輪塔がみられず、また一石五輪塔と同時代の、一石五輪塔に代わる石塔をも製作していないことは、室町時代後期の16世紀の第３四半期頃を境に急速に衰退し、第４四半期には蔵王での石造美術の製作が途絶えたとしか考えようがない。さらに時代が下がって、記年銘の入る江戸時代初期の墓標を見ても、花崗岩の利用は続けられているが、やはり「米石」を用いたものは見られず、近世では「米石」の使用は無くなっている⑰。

こうした事から考えて、蔵王での採石と加工の終焉は、一石五輪塔が盛行し始める、室町時代

後期の16世紀後半頃と推定され、「米石」が中世だけで利用の止まる石材であることが改めて証明された。

＜註＞

① 田岡香逸『近江の石造美術』3（民俗文化研究会　1976　大津）

田岡香逸『近江の石造美術』6（民俗文化研究会　1973　大津）

田岡香逸「近江蔵王の石造文化圏　付石大工平景吉の系譜とその作品」1～5（『民俗文化』195～199　滋賀民俗学会　1979～1980　大津）

② 兼康保明「中世の花崗岩石切場を訪ねて――滋賀県蒲生郡日野町蔵王勝手谷踏査記――」（『関西学院考古』8　関西学院大学考古学研究会　1987　西宮）

③ 田岡香逸『近江の石造美術』3（民俗文化研究会　1976　大津）

④ 田岡香逸「近江の石造美術補遺――獅子文と組紐式三茎蓮――」1～4（『民俗文化』242～245　滋賀民俗学会　1983～1984　大津）

⑤ 註③に同じ。

⑥ 広義の花崗岩とは、石造美術研究者が呼んできた湖東地域の「花崗岩」の意味で、岩石学的にみると、この中には、花崗岩以外に花崗斑岩（近江八幡市岩倉産）や湖東流紋岩なども含まれている。

⑦ 田岡香逸「近江の石造美術補遺――獅子文と組紐式三茎蓮――」1（『民俗文化』242　滋賀民俗学会　1983　大津）

⑧ 田岡香逸「近江蒲生郡の石造美術――蒲生町上麻生と日野町中在寺・安部居・村井――」（『民俗文化』219　滋賀民俗学会　1984　大津）

⑨ 田岡香逸「近江蒲生郡と甲賀郡の石造美術」（前）（『民俗文化』130　滋賀民俗学会　1974　大津）

⑩ 近藤豊・渡辺守順「建造物・石造遺宝・工芸」（『八日市市史』第2巻　八日市市役所　1983　八日市）

⑪ 兼康保明「赤人寺石造七重塔の新知見――蒲生郡蒲生町下麻生――」（『滋賀考古学論叢』3　滋賀考古学論叢刊行会　1986　大津）

⑫ 田岡香逸『近江の石造美術』3（民俗文化研究会　1976　大津）

⑬ 田岡香逸「近江湖北・湖東の石造美術」（『民俗文化』50　1967　大津）

⑭ 兼康保明「彦根市妙楽寺遺跡出土の湖東流紋岩製小形板碑と製作工程」（『滋賀文化財だより』121　滋賀県文化財保護協会　1987　大津）

⑮ 兼康保明『金山神社境内未完成石塔群の調査』（金屋石造品調査団　プリント　1987　大津）

⑯ 註⑮に同じ。

⑰ 例外として、蔵王金峯神社の手水鉢が江戸時代後期のものとしてある。石材は切出しではなく、玉石加工である。

＜追記＞

蔵王のかったい谷の調査から、もう5年が経った。その間、石材産地の調査として、犬上郡甲良町金屋、近江八幡市岩倉、坂田郡伊吹町曲谷などで、中世石造美術の石材加工技術の調査を行

ってきた。そのかいあって、ようやく鎌倉・南北朝時代の硬質石材の採石、加工の技術について、私なりの見通しがたってきた。さらに、近世前期の様相を製品から多角的にとらえようと、目下水蓮洞倶楽部同人の米田実氏とともに、蒲生郡安土町浄厳院墓地の調査を継続中である。こうした一連の調査の中から生まれた問題点を踏まえて、再びなつかしい蔵王の石材の評価を試みたものが、本報告である。

調査にあたっては、全て現物を検討したが、はじめて近江式装飾文の研究をまとめられた川勝政太郎氏や、、その研究を深めるべく、さらに近江で中世石造美術の精査を行われた田岡香逸氏の、長い研究活動がなければ、中世石造美術に考古学的な調査法を用いることも難しかっただろうと思う。半世紀近い研究の土台の上に立って、石材調査という目的の限定された調査を行うとき、学恩という言葉を改めて噛みしめ、感謝の気持ちでいっぱいである。また、日野町内の石造美術の調査に当たっては、日野町教育委員会日永伊久男氏より、格別の協力と配慮を得た。記して謝意を表したい。